

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## エスニック観光と「風俗習慣」の商品化： 西双版纳タイ族自治州の事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 清 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001563">https://doi.org/10.15021/00001563</a>

## エスニック観光と「風俗習慣」の商品化 ——西双版纳タイ族自治州の事例

長谷川 清  
文教大学

### はじめに

- 1 中国におけるエスニック観光と民族文化
  - 1.1 観光開発と少数民族
  - 1.2 雲南省におけるエスニック観光の展開
- 2 西双版纳における観光開発の現状

- 2.1 少数民族と観光化
- 2.2 観光政策の変遷
- 2.3 エスニック観光と民俗村
- 3 観光開発と民族文化
- 4 民族文化の産業化をめぐる諸問題

### はじめに

本稿の目的は、雲南省南部の西双版纳タイ族自治州（以下、西双版纳と表記する）における1980年代以降の観光化および観光開発の変遷過程を明らかにし、少数民族の伝統文化や風俗習慣がどのようにして商品化され、観光用の民族文化として新たな価値が付加されていったのかを、タイ族の事例に基づいて検討することにある。

西双版纳は、歴史的には雲南省南部のタイ族（傣族）のサブグループ、タイ・ルー（Tai / Dai Lue）が形成したシブソンパンナー王国（Sipsong Panna, 車里）に起源し、中華人民共和国の成立後はその支配領域をほぼ引き継ぐ形で民族自治州となっている。社会主義化政策が進められる中で、諸民族の伝統的な社会体制や文化状況は大きく変貌を遂げたが、1980年代からは観光化が進行した。近年では「拡大メコン地域（Greater Mekong Subregion）」のコア地域として国際的にも注目が集まっている。筆者は1980年代前半から西双版纳においてタイ族を中心にフィールド調査を実施し、伝統文化や生活世界の社会文化変容に関する資料を収集してきたが、観光化や観光開発が彼らの文化的アイデンティティの再構築やエスニシティの動態にどのように関わっているかについても関心を寄せてきた（長谷川 2001ab, 2003）。

中国において少数民族を対象とした文化観光は「少数民族風情旅游」、「民族風情旅游」、「民族文化旅游」、「民族民俗旅游」、「民俗風情旅游」など様々な名称で呼ばれている。しかし、いずれにあっても諸民族の伝統文化や風俗習慣を重要な観光資源としている点では大きな違いはない（呉必虎・余青 2000: 86-87）。ところで、あくまでも管見の範囲ではあるが、雲南省では「民族風情旅游」や「民族文化旅游」という用法が広く使われているようである。両者は内容面でほぼ同じであり、少数民族の服飾、飲食、住居、恋愛や結婚の習俗、宗

教儀礼, 年中行事, 舞踊, 体育活動, 工芸などを対象とした観光形態を意味する。本稿では, こうした観光形態にエスニック観光<sup>1</sup>という用語を当てるが, 必要に応じて「民族風情旅游」も使うものとする。

雲南省の少数民族地域の観光開発と民族文化の動態を対象にした人類学的角度からの理論的検討はまだ始まったばかりである(王嵐2003, 張曉萍2002)<sup>2</sup>。これらの現象はグローバル化における民族文化の動態や文化的アイデンティティの再構築に関わる問題として注目に値するが, 理論的枠組みの検討とあわせて事例研究の蓄積が不可欠である。本稿で依拠した民族誌的な資料は, これまでのツェンフン(景洪), ムンナム(勐罕, カンランパ)における現地調査によって得られたが, 2003年8月の時点までを範囲としている。両地区では観光開発が大規模に進行中であり, その後の変化が著しい点をはじめに断っておきたい。

## 1 中国におけるエスニック観光と民族文化

### 1.1 観光開発と少数民族

ローカル経済が発展途上にある国家にとって, 観光開発は地域全体に経済効果をもたらす有効な手段とみなされる。多くの民族集団を抱え, 民族間に経済発展の不均衡が存在している場合, それはしばしばエスニック観光の形態をとる。改革開放路線への転換以降「西部大開発」の方針を打ち出し, 内陸部の経済発展と現代化をめざす中国でも, 少数民族地域の観光開発に大きな期待が寄せられている(陳棟生・魏後凱等1996, 中国西南民族研究学会編2001)。多様な社会状況の少数民族を抱える雲南省においても観光開発は少数民族地域に経済発展をもたらす効果的な手法とみなされ, 省全体で取り組んでいる(松村2001, 鄭海2003)。

少数民族と観光開発の関係を中国の文脈において検討する場合, まず国家の側が彼らの伝統文化や風俗習慣をどのように民族政策の中に位置づけてきたかを見ておかねばならない。すなわち, 少数民族の文化伝統への国家的関心は「民族」の識別工作が大規模に進行した時期の1950年代に高まり, 民族政策の中で扱われるようになった。中国政府は少数民族地方に「民族区域自治」を実施し, 民族自治区や民族自治州を次々と設置する一方, 民族政策を実施した。少数民族の伝統文化や風俗習慣をめぐる諸問題は民族問題の核心にあるとされたのである。大躍進期や文化大革命期において伝統文化や風俗習慣を尊重する民族政策は中断したが, 第11期三中全会の開催(1978年)以後, 政府はこの政策を再び重要視するようになった<sup>3</sup>。さらにそればかりでなく, 観光資源としての価値にも注目しはじめたのである。この点は1950年代との大きな相違である。

対外開放政策の進展はそれまでの中国社会のあり方を一変させた。この点は観光についても言える。少数民族の生活文化や風俗習慣にエキゾチシズムやノスタルジーを喚起

された観光客は対外開放の拡大の中で「辺境」にまで足を伸ばすようになり、例えば雲南省の場合、大理、麗江、西双版纳、石林などでは「民族風情旅游」という用語が普及する以前において実質的なエスニック観光のブームが到来した。地元政府の側でもこれに柔軟に対応していくのである<sup>4</sup>。

1992年、中国政府は「友好観光年」の観光キャンペーンを展開した。これには中国西南部の少数民族を扱う「民族風情旅游」が含まれたが、それは地域の特性を活かして主題化されたエスニック観光であった。1993年から1995年にかけて「民族文化」や「民族風情」は観光産業との連携をより強めた(石茂明1995ab)。この他、1995年に企画された観光キャンペーンは「中国民俗風情游」であったが、その範囲は全国に及んだ(鄧永進・薛群慧・趙伯樂1997:163-164)。

## 1.2 雲南省におけるエスニック観光の展開

雲南省に居住する少数民族の種類が多さ、海拔高度によって多様に変化する地理景観や生態系の存在は、いずれも雲南省の観光にとって有利な資源であるばかりでなく、観光開発のあり方にも大きな影響を及ぼしている。雲南省の観光産業は接待事業型(1979～1988)、経済産業型(1988～1995)、支柱産業(1996～)という段階をたどって発展してきた(羅明義編2001:30-34)。

改革開放政策が始まった当初から、雲南省ではエスニック観光が目玉商品であった。少数民族地域を訪問してその衣食住の実際に触れ、市場やバザールで工芸品などを購入するという行為は、観光客にとって魅力的であり、刺激的でもあった。しかし、この段階のエスニック観光は観光客(ゲスト)と少数民族(ホスト)とで交わされる不作為的なコミュニケーション活動の延長上にあり、国家や政府による過剰な演出や商業主義が強く前面に出たものではなかった。観光客は少数民族のあるがままの家庭を訪問し、飲食のもてなしを受けることもあったが、それがかえって魅力でもあったのである。

雲南省が観光産業の推進を戦略として打ち出し、その発展のために様々な政策的措置を講じるようになったのは、第七次五カ年計画の時期(1986～1990)である。この時期から省政府は観光産業の育成を政策課題として重視するようになり、少数民族の伝統文化や風俗習慣の観光資源としての有効活用に取り組み始めたのである。一つの事例をあげよう。1988年9月24日から10月6日まで昆明で開かれた雲南民族芸術祭がそれである。この芸術祭の会場は昆明ばかりでなく、大理、西双版纳にも設けられた。多様な少数民族の存在を国内外に知らしめることになったが、特筆に値するのは民族ごとにそれぞれ代表的な舞踊を演じるチームが省内の各地域から動員され、開幕式のイベントを盛り上げた点である。雲南省に居住する主要な25民族、総勢3500名が集まった。また、「文芸搭台、経済唱戲」(文芸が舞台を組み、経済が劇を演じる)というスローガンが出され、中国全土の各省市から集まった代表団を交えた商談会や物産展、交易会が開かれた。

第八次五カ年計画の時期（1991～1995）になると、雲南省政府は少数民族地域の観光化の路線を打ち出した。省政府は観光を通じて「民族文化」を発揚する方針を明確にしたのである（中共雲南省委党史研究室編 1998:553-554）。1996年12月、雲南省政府は「自然風光と民族風情を特色とした観光産業」を創出するという発展戦略を発表し、観光を雲南省の基幹産業の一つに指定した（中共雲南省委弁公廳・雲南省政府研究室編 1997:281-295）。

1992年2月昆明で開かれた第3回中国芸術祭は「民族文化」と「民族風情」が雲南省の有力な観光資源である点を広く内外の人々に印象づけた画期的な文化イベントであった（中共雲南省委政策研究室編 1993:312-316）。少数民族が雲南省の観光産業の中での自らの位置を確立していく中で、少数民族の歌舞や風俗習慣の演出（表演）はしだいに商品化の方向をたどった。1990年代前半にはホテルやレストランでは少数民族の青年男女による民族歌舞ショーの舞台を飲食とあわせて提供するところも多数出現した。歌舞ショーでは恋愛などの生活習俗の一部が流用され（例えば、踊り手のタイ族女性が舞台から観客に向かって手毬に似たチューパオを投げるなど）、観光向けの民族文化が創られていくのである（張艾 1997:68-74、聶乾先 2003:194-197）。

上述してきた問題を別な角度から確認しておきたい。1980年代から雲南省を紹介するガイドブックは多数出版されてきた。そうした中で、エスニック観光にはどのような用語が当てられてきたのだろうか。エスニック観光に相当する「民族風情旅游」という用語がどの時点で観光のガイドブックに出現したかを資料不足から十分には確認しきれではないが、1980年代前半においては実体としてのエスニック観光が存在しても、それを特定した用語はなかったようである。雲南省の「旅游事業」を紹介した資料では観光資源を「自然旅游資源」と「人文旅游資源」に区分しているだけである（中共雲南省委政策研究室編 1986:1274-1276）。しかし、1991年には『雲南民族風情旅游 (SOCIAL AND SCENIC TOURISM TO YUNNAN NATIONALITIES)』（雲南民族出版社）と題されたガイドブックが出版されている。ここでは「民族風情旅游」を全面に押し出した編集企画となっている。また、刊行年の明示はないが、それよりやや前に刊行された雲南省人民政府外事弁公室編『雲南民族採風集 (HIGHLIGHTS OF MINORITY NATIONALITIES IN YUNNAN)』は少数民族の風俗習慣や代表的な祭りの写真を多数掲載し、各少数民族の概況を漢語と英語で説明している。序文で雲南省の「自然風光」と「少数民族風情」を紹介するのがねらいであるとしている。これに対し、1996年に出版された雲南省人民政府の観光ガイドブックでは「民族風情旅游」という用語が正式に使われている（李瑾・石莉・曾琦編 1996:37）。以上から、「民族風情旅游」が観光政策の中で雲南省のエスニック観光を示す概念として定着した時期は第八次五カ年計画の期間であると考えられる。

## 2 西双版纳における観光開発の現状

### 2.1 少数民族と観光化

1980年代以降の少数民族地域における観光化の進展の中で、西双版纳のエスニック観光はどのような経過をたどってきたのであろうか。以下ではこの点を検討していきたい。

1982年、中国政府は西双版纳を「風景名勝区」に指定し、翌年には中国全土を範囲とする44カ所の「国家重点風景名勝区」のリストに加えた。タイ族その他の少数民族の生活情景と亜熱帯、熱帯の動植物資源に恵まれた西双版纳は、魅力的な観光地であった。しかし、当時の西双版纳には観光を専門に扱う部署はなかった。州政府の外事事務室が観光客の接待業務を担当した。少数民族の村落にわずかでも滞在し、村人とのふれあいの機会を持つことは観光客にとって貴重な体験であった。また、これまで西双版纳を紹介するガイドブックや写真集が多数刊行されてきたが、1980年代以降に刊行された28種類の写真集を収集した李長風は、一つの民族自治州の出版状況としては全国でも上位の部類に入るとしている(李長風2005:121-126)。水かけ祭り(澆水節)、婚姻習俗、高床式住居、民族舞踊、仏教寺院、原生林、熱帯植物などは、西双版纳イメージを形づくる基本的な記号であった<sup>5</sup>。

1980年代の初期からエスニック観光は雲南省のいくつかの観光スポットにおいて実質的に始まっていた。しかし、制度化という側面からすれば、1980年代は発展の途上であり、あらゆる面で整備は十分ではなかった。また、「民族風情旅游」という用語もほとんど使われておらず、構想段階にあったと言えよう。その点を示す資料が残されている。それは中国の著名な地理学者、于光遠の指導の下で推進された西双版纳の総合的な経済開発に関するシンポジウムの記録をまとめた報告書である。この中では西双版纳の観光産業の発展問題についても議論された。すなわち、報告書は西双版纳の観光が「風景旅游」と「民族風情旅游」に大きな特色を有している点やツェンフン(景洪)、ムンハイ(勐海)、ムンヤン(勐養)、ムンヌン(勐崙)、ムンラー(勐臘)などを開発することが提案された(劉隆・胡桐元等編1990:581-582)。

第七次五カ年計画(1986～1990)の期間には州政府による西双版纳の観光資源に関する総合的な調査が実施された。これに基づく観光ルートや観光スポットの整備が進められ、観光が制度化されていく。1985年7月、観光を専門的に扱う部署として自治州政府旅游局(以下、州旅游局と表記)が発足した。景洪国際旅行社、西双版纳国際旅行社も創設された。翌年、州政府の専門委員会(西双版纳風景名勝区規劃建設委員会)が西双版纳の観光開発についての基本構想をまとめた(尹澤生・趙洪中1998:18-20)。この委員会が編集した観光ガイドブック『西双版纳覽勝』は「民族風情」という用語をキーワードに、観光資源やスポットを詳細に紹介している(西双版纳風景名勝区規劃建設委員会1989:51-101)<sup>6</sup>。

当時の代表的な観光スポットには、タイ族集落のバーンファイルン（曼飛龍村、バーンはタイ語で村落を表す）のバゴダ（曼飛龍仏塔）やバーンコー（曼閣村）の仏教寺院、バーンティン（曼听）公園、ツェンツウン布薩堂（景真八角亭）、ムンヌン（勐崙）の熱帯植物園、南糯山、基諾山などがあつた（楊美清・征鵬 1986）。こうした中に現れた新たな観光スポットが 1987 年にオープンした「西双版纳民族風情園」である。「民族風情」の展示を主たる目的とした野外博物館型の公園施設であり、1950 年代後期にツェンフンに入植してきた漢族移民が創建した農業試験場が規模を拡大し、新たな産業としての観光に進出したものである。このようなケースは他にもあるが、本来的には外部者であつた漢族が西双版纳における少数民族の文化伝統に基づく観光文化の創出にどのような役割を担ったかを考える上でも重要である。観光地として新しい観光スポットを必要とした州政府はその建設を推進したのである。この公園には様々な熱帯植物も植林されたが、その一角に「民族風情区」が造られた。ここにはタイ族、ハニ族、ラフ族、プーラン族、ジノー族、ヤオ族など、西双版纳に居住する主要な少数民族の伝統家屋が展示された。また、当該民族出身のスタッフが衣食住、恋愛、結婚、年中行事、宗教儀礼などを内容とする、それぞれの民族の伝統文化や風俗習慣について観光客に説明した。ステージや広場では民族舞踊や歌謡、娯楽性に富む体育競技などを演じた。「民族文化」と「民族風情」をパッケージ化し、手軽に楽しめる観光文化を創出したのである。それは、州政府の表現を用いれば「西双版纳の民族風情の縮図」（西双版纳風景名勝区規劃建設委員会 1989：61）であつた。開園後しばらくの間はたいした展示物もなかつたので、“大きな樹木だけの公園”と揶揄されたが、少数民族の伝統文化や風俗習慣の紹介、宗教儀礼の再演、民族歌舞など、観光客向けの文化展示を積極的に行い、西双版纳におけるエスニック観光をリードする役目を果たしたのである。

タイ族レストラン（傣味餐廳）の流行も 1990 年代の西双版纳のエスニック観光の展開を検討する場合に見落とせない。タイ族の伝統的な食べ物や料理が「民族風味」として商品化され、観光客の大歓迎を受けた。その経緯は以下の通りである。ツェンフン近郊のタイ族農村バーンツェンラン（曼景蘭村）のタイ族の農民夫婦が民家を改造して料理店「椰林傣味餐廳」を開いた。1984 年から翌年にかけての時期である。ツェンフンの街中には簡易食堂やレストランは多数存在していたが、それらは圧倒的に漢族が経営するものであつた。バーンツェンランの一角に登場した「椰林傣味餐廳」はタイ族が本格的に経営したレストランとしては初めてと云つてよかつた。物珍しさも手伝つて、連日大勢の客が集まつた。バーンツェンランはツェンフンの主要な観光名所であるバーンティン公園へと至る道路の中間点にあつて地の利が良かつたこと、漢族との日常的な接触交流を通じて村人が漢族の経営方式や商売上手を理解していた点がこうした成功の背景にはあるが、1985 年 4 月には 21 世帯のタイ族農民がタイ族料理店を開業し、しだいにエキゾチックな雰囲気漂う歓楽街を形成するに至つたのである（黄洪慶 1993：28-29）。

これらのレストランには「椰林傣味餐廳」以外に、「迎賓樓傣味餐廳」,「景蘭新興飯店(景蘭興光餐廳)」,「孔雀傣鄉飯店」,「醉君樓傣味餐廳」,「婉麗餐廳」,「園門傣味餐廳」,「千瓣蓮花飯店」,「玉池椰樓傣味餐廳」,「宣慰餐廳」などがあった。レストランの名称は漢語で付けられている場合が多かった。孔雀, 宣慰, 椰子, 蓮花などの文字からも窺い知れるように, 西双版纳やタイ族に対して漢族の側が持っているエキゾチックなイメージをうまく活用している。これらは料理店として営業を開始したが, 宿泊施設を併置してゲストハウス化するものもあれば, 店内に民族歌舞ショーのためのステージを作り, タイ族料理と民族歌舞を同時に楽しめるレストランへと変化したものもあった。歌舞ショーではタイ族の孔雀舞をはじめ, 諸民族の舞踊やパフォーマンスなどが上演され, ガイドブックに観光スポットとして紹介されるまでになったのである。こうしたバーンツェンランの農民によるタイ族料理の商品化は, 少数民族の側が自らの文化資本を市場経済の中で戦略的に運用した事例の典型と言えるものである。しかし, 西双版纳だけで起こった現象ではない。雲南省の中心都市の昆明はもとより, 他のエスニック観光のスポットでもほぼ同時期に自民族の飲食文化を商品化する動きが起きている点に注目する必要がある(横山 2004: 195-197)。

タイ族料理のレストラン経営は西双版纳以外にも広まり, 都市部でも開業されるようになった。筆者は1990年代の半ば, 北京でタイ族レストランを見て回る機会があった。タイ族が経営している場合もあったが, ある店の場合, メニューで紹介されているタイ族料理は西双版纳のそれとおおよそ似ても似つかぬ代物であった。経営者は北京生まれの漢族で西双版纳を訪れたことがなく, 四川出身の漢族を招いて調理させていた。話を元に戻そう。バーンツェンランの場合, 途中から経営者がタイ族から漢族に変わった店もあった。その結果, 経営内容にも変化が現れはじめ, 従業員は中国内地からきた若い漢族女性であり, タイ族の民族衣装を着ているだけという現象も起こり, 地元の人々から“偽物”と揶揄されたのである。

## 2.2 観光政策の変遷

1990年2月, 雲南省政府は西双版纳の観光開発をさらに推進するべく, ツェンフンでシンポジウムを開いた。この年はツェンフンに空港が建設され, 西双版纳の観光が旅客輸送の面で質的な変化を遂げた点でも特記に値する。4月, 正式に景洪空港が開港し, 以後, 西双版纳の観光は空路を利用した大量輸送とマス・ツーリズムの時代に突入していくのである。州政府は第八次五カ年計画期(1991~1995)の観光政策として, 1992年5月には観光リゾート開発へ本格的に着手する基本方針を打ち出した。この時期に自治州の州長を務めた刀愛民は観光開発の推進に関し, 以下の6項目の方針を指示している(刀愛民 1993: 11-14)。

- 1) 国際・国内の観光を推進する。「自然風光」と「民族風情」の優越性に依拠し, 西

双版纳の特色をもつ観光開発を進める一方、タイ、ラオス、ミャンマーなどの東南アジア諸国と観光を通じた地域間の交流を促進する。観光と国境貿易を結合させ、西双版纳に国家級の観光リゾート区を建設する。

2) 上の基本構想に基づき、観光開発に関する様々な措置を取る。基本的かつ標準的な観光ルートと観光スポットを建設する。すなわち、ツェンフンを中心とし、それを基点にしてムンハイ、ムンラー、ムンヤン、ムンヌン、ムンナムなどの重点スポットのルートを整備する。各スポットを結びつけ、イベント、サービス、管理などの面でより充実した観光産業を發展させる。

3) ツェンフン、ムンヌン、ムンナムなどに開発区の建設を進める。雲南省政府が策定した内容項目をよく理解した上で、観光開発の条件を改善する。ムンヌンの熱帯植物園、自然保護区、13種類の少数民族の姿を紹介する西双版纳民族風情園、バーンティン公園内の孔雀園、白象湖、孔雀湖、龍鳳湖などの水上観光スポット、仏教聖地、熱帯作物や漢方などの生産地の他、瀾滄江及びツェンフン、ムンナム、ムンヌン、基諾山の観光区、ムンハイの観光区を整備する。特に、ツェンフンの観光リゾート開発区、ムンナムの龍鳳湖の水上観光リゾート開発区は重要である。

4) 大量の資金を誘致して観光開発を推進する。観光を扱う企業は外資の導入によって経営内容を改造する。同時に管理体制を整備し、州旅游局は州全体に対する管理を強化する。外国人のためのホテルを建設する。版纳賓館の第二期改修工事を進める。西双版纳民族風情園にタイ族、ハニ族、プーラン族、ジノー族、ラフ族、ヤオ族などの民族的な風格と設備のある観光村を建設する。また、ツェンフンなどにタイ族村落の特徴を活かした観光村を建設するばかりでなく、さらに民俗や風情を特徴としたリゾート区、リゾート村の建設を州全域に拡大する。

5) 観光商品と製品の開発を進める。法律に基づいて景勝地、観光スポットの保護と管理を進め、スポットや民俗活動の宣伝を通じて西双版纳に対する観光客の理解と関心を深める。果物、飲料、菓子、民族服飾用品、工芸美術品、記念品など、観光土産の創作や改良に努める。果物、漢方の原料である南薬、茶葉などの加工基地を建設し、西双版纳の風味、飲料、製品を提供する。

6) 職業クラス、外地への派遣学習、職業訓練、関連教育機関との連携など、各種の有効な形式を通じて観光業に従事する人材を育成する。

以上に掲げた項目から、州政府が1990年代前半に推進した観光開発がどのような課題を抱えていたかを理解することができよう。それは観光を西双版纳の基幹産業と位置づけ、観光地としての基盤整備を進めて観光産業を育成していくことにあった。それは西双版纳の地理的な優位性に基づいて「亜熱帯風光と民族風情を主体とする」観光リゾート開発の手法であった。こうした方針の下、ツェンフンを起点にした東線、西線、南線、

北線の4ルートその他、瀾滄江・メコン川の周遊ルート、中国・ミャンマー、中国・ラオス、中国・タイ間の越境ルートが整備されていったのである。しかし、いずれも場合も海外資本も含む外部からの投資導入、資金調達をいかに実現するかが大きな課題であった(刀愛民1994, 同1995)。

これらについて若干補足しておきたい。1992年だけでもバートゥー(曼園村)の民俗活動村、向陽ハニ族茶文化観光村、龍帕ジノー族民俗観光村、西双版納原始森林公園など、10カ所が新たに建設された。西双版納原始森林公園の場合、「森林、野生動物、民族風情」をキーワードに構成された野外博物館、テーマパークである。広大な敷地が必要であり、ツェンフン市郊外の森林・丘陵地を活用した。浙江金洲集团股份有限公司が建設資金8600万元を投じた。この公園はその後、西双版納を代表する観光スポットとして発展を遂げ、中国政府から国家AAAA級の「旅游景点」に指定されるまでになっている。

国境を越える観光ルートの制度化に関しては、景洪港を出発して瀾滄江を下った中国側の河川船舶「版納号」がメコン川沿いの交通拠点フェーサイ(ラオス)を経てチエンコン(タイ)までの航行に成功したことでにわかに現実味を帯びたものになった。雲南省南部と東南アジア大陸部の間に瀾滄江・メコン川を基軸とする広域的な河川観光と交通運輸システムの構築が可能となるからである。

亜熱帯の自然景観と風光明媚なタイ族集落からなる、文字通り“美しき西双版納”のショーウィンドでもあるムンナム<sup>7</sup>の観光リゾート開発は、ツェンフンのそれと並んで大がかりなものであった。州政府は龍鳳湖を中心とした4平方キロメートルの範囲内に、リゾート村、別荘、水上遊覧区、民俗区、熱帯植物観賞区、ゴルフ場、ショッピングセンター、国際会議センターなどの8つの機能に分化した観光公園を建設する構想を明らかにしたのである。この公園の建設は香港資本との合資形式を採用し、総投資額は411.5万元であった。資金の一部を負担するツェンフンの代表的な観光ホテル、傣園飯店が1992年6月から建設工事に着手した(汪濤1993:12)。カンランパ農場もこの観光リゾート開発計画に積極的にに関わり、旅行社を設立して観光事業の経営に乗り出した。

1992年10月、雲南省政府は西双版納を省級の観光リゾート地区に指定した。こうした措置を並んで、翌年12月に景洪県は景洪市へと格上げされた。これは国境地域の対外開放の拡大に向けて瀾滄江・メコン川開発を前進させる中国政府の発展戦略に合致していた。瀾滄江に面する景洪港は国家級の貿易港(口岸)に指定されたが、将来の発展が期待されるツェンフンには観光リゾート開発区が建設されることになったのである。こうした開発計画の影響を真っ先に受けることになったのはツェンフンのタイ族農村バートゥーであった。村人の保有する農地や経済林が開発用地として扱われることになったからである。これは政府側がタイ族農民の生活基盤であった農地を収用し、人々に従来の伝統的な生業形式を放棄させたという点で、この時期の観光開発のあり方を象徴する出来事でもあった。これ以後、第一次産業から第三次産業への転換が少数民族を巻き

込む形で進行し、タイ族農村は様々な面で市場経済と観光開発の波に吞まれていくことになった。伝統的な生活世界の変容はもはや不可避であった。

以上に見てきたように、1990年代前半の西双版纳では観光リゾート開発が推進された。そうした中で、少数民族の伝統文化や生活環境の保存、あるいは観光文化のあり方などにおいて、やや強引すぎる開発行為が少なからずあったようにも思われる。開発主体の利益確保が優先し、開発される側の少数民族の意見がはたしてどの程度考慮されたのかと思わざるを得ない側面がある。部外者にすぎない筆者がこの点を主張しすぎるのはそれ自体として別な問題を含んでいるが、次のような意見がタイ族の側にあった点を紹介しておきたいと思う。

1990年代前半の観光開発において、パゴダ（仏塔）などの宗教的なシンボルのコピーが観光スポットに建てられる場合がしばしばあった。例えば、ツェンフンの中心的な寺院であるワット・パーツェ付近にパゴダと布薩堂のミニチュアが造られている。これは観光客にとって記念写真をとる格好の場所である。しかし、その経緯についてタイ族の側にあった一つの意見を拾ってみると、当時これらの建設をタイ族農民と僧侶は反対したという。寺院の側もこれを壊すようにと主張した。仏教儀礼によって開眼していないのでタイ族の人々は参拝しない。僧侶による仏教儀礼を経て“本物”となるというのが、そうした意見の骨子であった。このような“偽物”のパゴダは西双版纳原始森林公園内にも建てられた。タイ族の側はこれにも反発したが、建設にあたった浙江人の側は西双版纳のためにやっていると反論した。観光開発の過程で、タイ族の伝統文化や風俗習慣、宗教信仰に対して理解を示さず、観光客向けの宗教建築物のコピーを再生産する行為に西双版纳のタイ族が反感を抱いたのである。だが、こうしたタイ族側の意見はかならずしも大きなものとならず、ほとんど考慮されなかったのである<sup>8</sup>。

こうした事例はほんの一例にすぎないが、観光スポットの開発に関しては、開発する／される側の双方における伝統文化の保存や環境保全をめぐる合意形成や対策の検討が後回しになることが多かったのである。それは観光開発に関する法的な整備や管理行政の不十分さが招いた結果であったとも言える。

### 2.3 エスニック観光と民俗村

前述したように、中国では観光化の進展とともに「民族風情」や「民族文化」が新たな消費文化として人々の間で普及し、開発の対象になった。伝統文化や風俗習慣の一部を選別して加工するという、一種の文化的再編成が進行していくのである。ことに飲食に関する分野でそうした動きは顕著であった。この点は西双版纳でも同様である。観光化の波は当然タイ族の村落にも及んだ。制度化された観光ルートの適当な地点に観光客向けの休憩施設を設け、飲食や歌舞ショーなどでもてなす場所が各地に出現したのである。こうした中には州政府から「民俗村」として観光スポットに指定された村落もあった。

例えば、ツェンフンではバーンモーロン（曼麼龍村）、バーントゥー（曼闌村・民俗村）、バーンドンデン（曼鸞典村・民俗村）、バーンドンロン（曼暖龍村・版納民俗樂園）などのタイ族村落は当時多くの観光客を集めた民俗村であった。ムンナムでは瀾滄江に面したいくつものタイ族村落が民俗村として扱われた。バーンゲン（曼将村・勐巴拉那西王国園林）、バーンソンモン（曼春満村・風情園）、バーンティン（曼听村・風情園）、バーンコイ（曼桂村・民族神話園）などがそれである。これらはいずれも1992年から93年、さらにその翌年にかけて営業を開始した（尹澤生・趙洪中1998：48）。以下ではそのいくつかについて概要を示す。名称は観光用のガイドブックで紹介されるまを用いる。

#### 事例1 曼闌民俗村

1992年、州旅游局、州国際旅行社およびバーントゥー（曼闌村）の共同出資によって村落の寺院付近の空き地に300人を収容できる休憩所を設けた。また、観光客が水かけの儀式（澆水）に参加するための仏塔式の井戸を作った。タイ族料理のレストランも用意した。タイ族料理のほかに、黒陶、織物や女性用の筒スカートなどの民族衣装や工芸品が販売された。村の青年男女からなる歌舞隊があり、各種の民俗活動や民族歌舞、水かけなどを演出した（尹澤生・趙洪中1998：169）。

#### 事例2 曼曼鸞典民俗村

1992年、嘎棟郷政府とバーンドンデン（曼鸞典村）の共同出資で創設され、1993年1月から営業を開始した。村落の入り口付近に建てられたタイ族式建築が歌舞ショーとタイ族料理を客に提供するための主要施設である。1994年に国外から来た漢族が資金を出して施設を拡充した。村人の歌舞隊があり、民族舞踊、水かけの儀式などが演じられた。村内では闘鶏、織物製作、米搗きの実演など、タイ族の生活習俗が披露された他、工芸、民族衣装、織物、黒陶、絵画なども販売された。夜間にはロケット花火や伝統的な熱気球（孔明灯）の打ち上げを行った（尹澤生・趙洪中1998：167-168）。

#### 事例3 勐巴拉那西王国園林

バーンゲン（曼将村）の寺院境内の空き地に、タイ族の神話伝説の中に登場する神々の塑像や寺院、パゴダなどの模型を置いた施設である。白象王子、孔雀公主などの伝説の主人公やタイ族のムンルー王国の歴史に関する展示物もあった。チャオストーン王子とナムノナ姫が湖の畔で出会う場面のレリーフがあった。水かけ、船漕ぎなどが行なわれた（楊勝能1988：26）。

#### 事例4 曼桂神話園

公路に面したバーンコイ（曼桂村）の一角に建てられた。建設資金は香港の個人投資

家が提供した。塑像を主にした「民族神話園」である（楊勝能 1988：26）。すなわち、タイ族の創世神話に基づき、パヤー・インなどの天神、パヤー・サムディなどの英雄などを具象化して展示した。「貝葉文化」の展示が“売り”であった。しかし、本来、タイ族の間では具象化されていなかった神々の像を勝手に造ってしまった点においてタイ族の村人の側に強い反発があったという。経営が軌道に乗っていた時期には約 60 人が働いており、歌舞の踊り手、ガイド、サービス、警備、清掃などの仕事を受け持っていた。みな中卒以上の学歴であり、三分の二は付近のタイ族村落の出であった。残りは漢族やタイ族以外の少数民族であった<sup>9</sup>。

#### 事例5 曼春満公園

1993年に観光スポットに指定された。バーンソンモンの寺院を中心とし、その周囲の村落の共同で休憩所などを整備したが、16万円かかった。バーンソンモン、バーンティン、バーンツァー、バーンロンダイ、バーンコンロン、バーンカート、バーンゲンの7村落（いずれもタイ族）で道路の補修工事を行った。その費用は州政府が10万円、景洪市が10万円、鎮政府（勐罕鎮）が3万円、バーンティン村の役所（弁事処）が1万円を出した。7村落は18万円を出した。入場料を観光客から徴収した<sup>10</sup>。

民俗村は「遊覧、食事、宿泊などが一体となっているか、あるいは専門的に少数民族の風俗習慣にもとづく演出活動に従事する、あるいは民族的な風味のある食品によって諸民族の飲食文化の多様性や豊かさを展示する施設」と定義されている（楊勝能 1998：24）。ここにあげた民俗村は当時比較的良好に知られたものばかりである。実際にはこの他にも似たような営業を行う村落は観光スポットの周りや観光ルート沿いに各地に出現していたようである。

まず、これらの民俗村の経営形態を整理しておこう。民俗村は観光客用の休憩施設などが不可欠であり、村落のリーダーたちは建設資金をどうやって工面するかが課題であった。また、村落の側では観光化の成功が未知数でもあり、ましてや全ての建設資金を村落だけでまかないきれぬ経済的なゆとりもなかった。その結果、外部の出資者との共同経営の形式が現実的な選択肢であったのである。上述の5つの事例は、州旅游局、州国際旅行社、タイ族農村の合資経営（事例1）、郷政府との共同出資（事例2）、カンランバ農場の退職職員3名による合資経営（事例3）、香港の個人投資家（事例4）、タイ族農村の単独経営（事例5）のタイプに分けられる。これらの中で、州政府や旅行社からの投資による民俗村の開設、国営農場とタイ族村落による共同経営の実施などのケースは、いかなるローカルな社会関係や民族間関係の文脈の中で少数民族の側の伝統文化や風俗習慣が開発されたのかを明らかにする上で重要な手がかりとなる。この点に関し、曼桂神話園（事例4）については聞き取り調査を通じて以下のような資料を得た<sup>11</sup>。

曼桂神話園の経理を担当したのは、1955年生まれの湖南省出身の漢族移民である。彼の両親は1960年に辺境支援として国营農場を創設するために西双版纳にやってきた。彼は神話園の経営を手がける以前はカンランパ農場の運転手であった。彼の話によると、当時バーンコイの周囲は鬱蒼とした原生林であった。森林の伐採作業が毎日の主な日課であった。1962年からゴムの植林を開始した。1966年には大量の知識青年が移住してきた。大規模な移入移住があった。1991年から92年に観光業が西双版纳で始まった。彼は学校時代に教えを受けたS氏（漢族男性、当時53歳）と相談し、観光業に乗り出した。この人物は下放運動によってこの土地にやってきた昆明出身の知識青年であった。移住後、彼はカンランパ農場第二分隊（二分場）の教員として働いた。S氏は次のような意見もっていた。西双版纳にやってくる観光客は昼間に寺院を参観し、夜はただ寝るだけだ。これは「民族文化」が空っぽであり、本物の観光とはいえない。だからこそ「文化旅游」が必要だ。そこで思いついたのはタイ族の伝統文化である「貝葉文化」を売ることだった。まず、タイ族の仏教経典（貝葉経）の中に登場する神々を展示し、タイ族の伝統文化を観光客に見せる。現在の水かけの儀式（澆水）は漢化してしまっているが、自分たちは文化大革命以前にタイ族の村人の“水かけ”を見たことがあり、本来の形がどのようなかを理解している。この神話園ではタイ族の神話に依拠した“水かけ”を提供する。その代わり他のスポットと違い、現代化された民族歌舞ショーの上演はしない。この点は他の公園とは違う。彼らは神話園を建設するに先立ち、何人かのタイ族の知識人を訪ねて「貝葉文化」について理解を深めた。1993年、神話園を開設する申請手続きを行った。最初は自治州の指導者や会社の経理らと共同で経営しようと考えた。しかし4、5カ所の会社が関わったこともあり、互いの協力関係がうまく調整できずに破産した。その後、香港の投資家がやってきて、この観光スポットの将来性を見込んで資金を提供した。投資額は1回目が47万元、2回目42万元、3回目38万元であった。

この資料は様々な立場の利益が絡まりあう中で進行した民俗村建設の舞台裏の状況を示している。この事例に限らず、個々の民俗村をめぐる利害関係はいずれも複雑であったが、ここで見落とせない点は、民俗村の創設、換言すれば「民族文化」の開発の推進者がタイ族村落ではなく、投機的な性格をもつ外部者の側にあったこと、村落の側はその恩恵を受けられる可能性があるとはいえ、それはきわめて受け身であったということである。こうした観点からすれば、バーンソンモンの事例（事例5）は村落の側がそれなりに主体性を発揮し、民俗村を創設した事例であると考えることができよう。聞き取り調査によれば、1994年の時点でバーンソンモンの観光収入は月平均1万元ほどであった。これらの収入は4割を各世帯に配分し、3割を公園運営料、残りを寺院修復費に充当するというものであった。

開設当初、民俗村は物珍しさもあり多くの観光客を集めた。観光客の大半はマス・ツーリズムの拡大によって急増した国内各地からの団体客であった。安価なパッケージ・ツ

アーの対象として民俗村でのレクリエーションや食事は好まれたのである。パーンソンデン（事例2）の場合、開村以来3万人の観光客を接待したという（汪涛1993）。

民俗村の最大の目玉は、観光客が参加する「民俗活動」であった。それには婚礼習俗の再演、水かけの儀式、民族歌舞ショー、ロケット花火の打ち上げなどがあった。また、観光客は“本物”のタイ族料理を楽しむことができた。しかし、大半の民俗村は村落全体を管理してトータルな観光空間の演出を行い、村人の生活文化の総体を展示するという装置としては不十分であった。すなわち、村の広場や共有地などに作られた休憩所や民族歌舞の舞台などが「民俗活動」の拠点であった。こうした空間において村人の側は伝統文化や風俗習慣の一部を選び取り、観光客に向けた自文化の演出行為に参画したのである<sup>12</sup>。

民俗村が村落農民の側に一定の経済利益をもたらしたことは事実である。例えば、パーンソンモンでは民芸品を販売することによって高収入を得るタイ族の農村女性が登場し、民芸品販売は村人の間で流行した。この現象は、パーンツェンランにおいてタイ族の間にレストラン経営がまたたく間に普及したことによく似ている。だが、民俗村は問題点も多かった。1992年以降の開発ラッシュの中で観光開発のスピードがあまりにも急速であったこと、その結果、伝統文化の保存よりも利益優先の商業主義が横行したことなどがあげられる。政府の管理が行き届かず、民間レベルの稚拙な経営内容が主流を占め、伝統文化の乱開発を助長するという皮肉な結果を招いたのである。

### 3 観光開発と民族文化

マス・ツーリズムの到来は西双版纳における観光産業を一挙に開花させた。だが、流動人口の急増は都市部の生活環境の悪化や少数民族の生活空間の混乱など、多方面にわたるマイナス影響をもたらした。風俗上の社会問題も引き起こした。こうした状況の中で、粗製濫造された観光スポットや観光業者の悪質な経営内容に対し、観光キャンペーンにおいて喧伝される西双版纳の“楽園”イメージと実際のギャップに落胆した観光客の側から厳しい批判が寄せられたのである（羅紅英1999）。

州政府の統計によれば、1990年代後半には西双版纳の全域で大小あわせて98の旅行社があったという。そのうち経営の質が高く利益を出している旅行社はわずか3割程度であった。その他はいずれも経営状態が悪かった。また、観光業者としての正式な許可書を持っている経理は3割、証明書を保持するガイドは2割程度であり、明らかに政府側の管理は不十分であった（黄金有1999：62）。

こうした事態に対し、1997年8月、州旅游局は観光政策の大幅な見直しを実施した。マス・ツーリズムが西双版纳の観光にもたらした質の低下やマイナス影響を改善するために、現行の観光ルートの再検討と観光業者、旅行社に対する管理を強化することにし

たのである。その結果、観光スポットの特徴や投資形態、経営内容、管理状態などを総点検し、粗悪な観光商品や観光スポットの経営停止と高品質の観光スポット（精品景点）の建設を進めることになった（王軍健 1999）。州政府は乱立していた観光スポットを吟味し、民族風情園、曼听公園、原始森林公園、熱帯植物園、タイ族園（後述）など、西双版纳の全域で12の公園だけを政府指定とし、翌年2月には「旅游興州」（観光によって自治州を発展させる）という開発戦略を打ち出した<sup>13</sup>。

民俗村はどのように扱われることになったであろうか。マス・ツーリズムの発展期を過ぎた雲南省の観光地は互いが競合しあうようになっており、従来の観光開発の手法は見直しを迫られていた。西双版纳でも観光産業をさらに発展し高品質化とブランド化を進めていかねばならなかった。州政府や旅游局の立場からすれば、民俗村の多くは民間が経営している観光スポットにすぎず、経営が悪化した民俗村はイメージダウンにつながる存在となっていた。その結果、民俗村は州政府の指定からはずされることになった。すでに制度化されていた観光ルートに政府指定の「民族文化」の凝縮した高品質のスポットを効果的に配置し、州政府の管轄下で統一的に運営していく必要があったのである。

観光スポットの選別的な運営方式への転換はエスニック観光の質的变化を当然含んでいる。少数民族の村落の生態環境をそのまま保全する一方、観光地としての高品質化に資する精選された「民族文化」を展示する観光空間の創出が急務の課題となった。この点に関して、ムンハムのタイ族園の建設は注目に値する。州政府の側はムンハムのパーンソンモン、パーンティンなどのタイ族村落について民間主導による村落ごとの経営方式では不十分であると判断し、パーンソンモンを含む近隣5カ村の自然景観を観光ゾーンとしてまるごと保全する方針を出した。この形態は1998年から開始されたが、タイ族園という観光ゾーンの創出と整備においてタイ族村落、カンランパ農場、広東省広東東莞市信譽実業総会社が共同で経営していくことになった。タイ族村落への配慮としては、民族歌舞、警備、工芸品制作などの要員として、タイ族農民の子女を正式な職員に採用していく方針をとった。計画では15億元を投入して基盤整備を3期に分けて行い、タイ族園としての完成をめざすとした。第一期工事ではタイ族園の入り口の大型ゲート、寺院の修復工事、民族歌舞劇場、水かけ用の広場、瀾滄江畔の民俗活動区などの基盤整備を行った。4000万元が投資された。第二期、第三期の工事を通じて施設を拡充していき、リゾート観光の拠点化をめざすというものである<sup>14</sup>。2001年に広東省東莞市の会社は撤退し、代わって雲南省宜良県にある南洋建築会社が建設資金を出資し、経営に参入することになった。

タイ族園は西双版纳タイ族自治州旅游局編のガイドブック『西双版纳旅游指南』（1999年）には州政府の指定を受けた観光スポットの一つとして紹介されている。現地を訪れてみてひときわ目につくのは、公園入り口の大型ゲート、民族歌舞劇場、水かけ用の広場などである。それらはタイ国の建築様式などを取り入れ、整備の行き届いた公園空間

となっている。伝統的な村落景観の保存や維持を村人の側に義務づけるとともに、観光客の側の環境保護の意識向上にも取り組み、1990年代初頭に流行した民俗村とは明らかに一線を画している。民俗村のこうした変化からみれば、西双版纳の「民族風情旅游」は雑多な観光スポットが併存していたマス・ツーリズムの段階から、州政府、国营農場、タイ族集落、ホテル、旅行社など、観光開発に関わる各セクターが関係しあう民族文化の産業化の段階へと進化したといえる。また、観光空間としての整備が進み、多くの観光客が訪れるようになる中で、タイ族の様々な風俗習慣が舞台の上で操作的に演出され、芸術化が進行している点は今後の検討に値する<sup>15</sup>。

#### 4 民族文化の産業化をめぐる諸問題

1980年代以降、西双版纳では熱帯や亜熱帯の動植物、生態環境、少数民族の生活文化や風俗習慣など、多様な資源が組み合わされた観光地化が進んできた。今日では雲南省の代表的な観光スポットとして中国内外から多くの観光客を惹きつけている。その観光地としての発展の過程は、第七次五カ年計画期における接待型に始まり、第八次五カ年計画期における基盤整備と観光産業の奨励、「旅游興州」戦略に基づく高品質化とブランド化、という3つの段階を経てきている（罕華興 2000：270-271、汪涛 2000）。

観光地としての西双版纳の課題は、雲南省の他の観光地との差異化を図り、競争力を高めることである。州政府は高品質の文化内容を有する観光スポットの創出に向け、歴史文化遺産の保存と復興に取り組み、「貝葉文化」を奨励発展させる方針を打ち出している（艾温扁 1999、秦家華・岩温扁 2000）。「貝葉文化」はタイ族の伝統文化の総体を指した用語であり、タイ族の信仰する上座仏教の経典（タム）が貝葉であることに由来する。担い手のタイ族は上座仏教文化圏に属しタイ北部やミャンマーのシャン州、ラオス北部などのタイ系諸族と交流してきた。こうした彼らの歴史の記憶がこうした民族文化の命名法を根拠づけている。

瀾滄江・メコン川開発の推進によって市場経済の浸透が一段と加速化される西双版纳では漢族を主体とした多数の外来人口が流入し、立場の異なる利益主体が交錯しあっている。エスニック観光の推進にとって、その資源的基礎である伝統文化や風俗習慣は、国家や政府による管理と法的規制による保護がなければ、その存続がきわめて困難な状況にある。多くの観光客を魅了したバーンツェンランが急速な経済開発と流動人口の衝撃によってそれまでの生活世界をわずかに数年で一変させたという事実を忘れてはならないだろう。

タイ族園の例を引き合いに出すまでもなく、政府主導の少数民族の文化遺産の保護政策がすでに一定の成果を取めていることは明らかである。また、観光開発の推進と民族文化の産業化は地域・民族間の経済的格差の解消に有益である。だが、観光資源として「民

族文化」の再編化と選別化が進められる一方で、村人の生活世界において浸透する市場経済や現代化は、タイ族の伝統文化とアイデンティティの根幹を揺るがしている。例えば、観光スポットの高品質化の典型ともいえるタイ族園の周辺でどんな現象が進行しているのだろうか。

逆説的だが、タイ族の民族文化の維持が義務づけられているタイ族園の周辺村落では都市文化や商業主義の流入、漢族的な生活習慣への移行、宗教信仰の希薄化や世俗化などが顕著である。筆者はツェンフンやムンハムのタイ族村落において見習い僧になる少年の数が著しく減少している事実をフィールド調査によって確認してきた。男児が寺院で一定期間出家し、仏教経典に書かれる旧字体のタイ・ルー文字（タム文字）を習得するという、タイ族の伝統的な宗教的慣行は実践されなくなっている。

筆者の調査によれば、タイ族園の近隣村落において、寺院に止住して経典学習を行っている見習い僧の大半は当該村落の出身者ではなかった。彼らのほとんどは宗教信仰の依然盛んな景洪市の南部に位置するムンロン（勐龍）から来ていた。寺院に僧侶がいなくては村人の必要とする仏教儀礼ができないので、他の地区から見習い僧や僧侶を招いているのである。また、経典文字や仏教経典に通じる村の知識人も減少しつつある。

市場経済化の波はタイ・ルーの人々の関心を現代的な消費文化へと向かわせている。タイ族の現実の生活世界の日常実践と再構築されたタイ族文化の理念型としての「貝葉文化」との間には亀裂やずれがある。再構築された「民族文化」と生きられる文化は、エスニック観光という磁場にあって、今後いかなる関係を紡ぎ出していくのであろうか。今後も観察を続けていく必要がある。

## 注

- 1 エスニック観光 (Ethnic Tourism) の定義や内容については様々な立場や見解がある。足立 (2000) はエスニック観光を以下のように幅広く捉えている。1) 観光客がホテルやレストランで民族舞踊や民族音楽を鑑賞する、2) 実際に集落を訪問することによって祭りや儀礼、民族舞踊や民族スポーツなど伝統的な活動に参加する、3) 民族村などのテーマパーク、民族博物館、郷土資料館を訪れたり、エスニック・レストランで料理を楽しんだりする、4) 民族工芸品や装飾品を購入する、5) 民族工芸品や装飾品を購入するなど、観光客が民族集団のエスニシティに関わる様々な観光活動を一括してエスニック観光とみなす立場である。
- 2 雲南省における観光産業の重要性がますます高まる中で、文化の商品化や真正性、持続可能な観光開発の問題や少数民族の文化資源の産業化、観光文化の創出に関する議論が行われるようになっていく。以下の文献も参照 (瀬川 1999, 彭文斌 1998, Tan Chen-Beng, Sidney C. Cheng and Yang Hui, eds, 2001, 張曉萍・揚慧・趙紅梅編 2005)。
- 3 民族政策との関係において諸民族の「風俗習慣」をめぐる状況は、おおまかに3つに分けられている。1) 健康的で有益なタイプ。例えば、少数民族の伝統行事の期間に行われる格闘技、歌比べ、舟漕ぎ競争などの体育活動、文芸活動、物資交流会など。これらは民族精神を振興することに積

極的な作用がある。それは諸民族の文明遺産であり、中華民族精神文明の重要な要素である。2) 良い悪い両面があり、利益や弊害が半々のタイプ。諸民族の服装、飲食、礼俗などである。これらは自然の変化に任せるが、適切な新しい内容を注入することによって良い方向に転化させる必要がある。3) 後進的で有害なタイプ。生産活動における森林や土地の破壊行為、禁忌の日、近親婚、不落夫家、葬送儀礼における動物供犠などのいわゆる迷信活動。これらは改革の対象である（彭英明編 1995：325-330）。

- 4 民族文化を主題とした文化展示は、1985年に民族文化宮（北京）で举行された「貴州侗族建築及風情展覧」が一つの転換点になった。この展覧会において解説を担当したスタッフは、民族衣装を着て展示室の室内でトン族大歌を歌い、観客のために儀礼活動を再現した。中国少数民族の展覧の歴史において民族文化の演出がはじめて行われたケースである。これ以後、見学者のためにスタッフが民族衣装を着て、工芸品の制作過程や楽器の演奏を披露し、歌舞のパフォーマンスなどを演じることが多くなったという。貴州省で1986年に全国で初めての「民族文化村」が建設された（周怡文・祁慶富 1994:86-88, 李鉄柱 1994:47-49）。詳しくは、以下の文献も参照（Oakes, Timothy S. 1997・1998, 周星 2001）。
- 5 征鵬の著作が果たした役割はきわめて大きい。彼は1981年に『西双版纳風情』という小冊子（征鵬 1981）と『西双版纳紀行』を出版した。後者は英語その他の外国語で出版され、西双版纳の風物や少数民族を中国内外に広めるのに重要な役割を果たした。観光地としてイメージや文化表象の呈示の基本的なかたちは、ほぼこの時点で確立したとみてよいだろう。
- 6 征鵬らが雲南民族出版社から1986年に出版した『西双版纳風情奇趣録』は3年間で3万冊が売れたとされる（征鵬・楊勝能 1993：1）。ここではタイ族を中心に、ハニ族、ジノ族、ラフ族などの少数民族の風俗習慣が紹介されているが、「民族風情」という用語は見当たらない。
- 7 1980年代後半に州政府によって編集された観光ガイドの中でカンランパ（ムンナム）は以下のように記述された。「カンランパの最も重要な特徴は濃厚な熱帯の風光とタイ族の竹楼、民族風情とが巧みに結びついていることだ。ここには高層ビルもなく、スーパーマーケットもない。自然の美、純朴な美にあふれ、現代生活が破壊してしまった静謐な美がある」（西双版纳風景名勝区規劃建設委員会編 1989：67）。
- 8 自治州人民政府政治協商委員会のS氏からの聞き取り調査（2000年9月1日実施）。
- 9 曼桂村での聞き取り調査に基づく（2000年9月2日実施）。
- 10 ムンナム地区の聞き取り調査に基づく（1994年8月16日実施）。
- 11 2000年9月2日に聞き取り調査を実施。インフォーマントはこの神話園の当時経理を務めていた男性である（当時45歳）。
- 12 タイ族の婚礼の上演は多くの民俗村の項目になっていたようである（刀国華 1997：53, 袁国光 1997：35-36）。
- 13 景洪市旅游局での聞き取り調査に基づく（2000年8月30日実施）。1990年代前半のガイドブックと近年のそれ（西双版纳州旅游局編 1999）を比較すると違いがはっきりと現れている。後者には精選された観光スポットだけが紹介されている。
- 14 タイ族園での聞き取り調査に基づく（2000年8月28日）。別な調査資料によれば、以下のような状況であった。会社側は5村の土地700ムーを租借し、農地に対しては1ムーにつき年500元のレンタル料を支払う。薪林には1ムー当たり年間250ムーを支払う。毎年5村落は土地の補償金40万円ほどの収入を得る。タイ族園の要員は242名ほどいるが、5村落からは114名を雇用了。これらの人々には一人毎月500元を給与として支払う。この他に、協力者や水かけ活動に参加する人々が77名ほどいる。観光スポットとしてのレンタル料として、パーンティンには毎年3万元、

- バーンソンモンには5万円を支払う。村人が直接に観光から得る収入は、バーンソンモンを例にとれば約2万円である。中卒者以上の村人を対象に、「旅游興州」戦略、タイ族園会社の経営方針、観光サービス、民族団結教育などについての講習会を開いた（史軍超 2003：423-425）。
- 15 2000年8月28日に実施した現地調査によれば、民族歌舞劇場の看板には、以下のような内容の演目が紹介されていた。1) タイ族の王族の婚礼。これには観光客から選ばれた男性が舞台上がってタイ族の王女と結婚するという観客参加型の出し物である。2) タイ族の若い娘が瀾滄江畔で水浴をするシーン。3) 毎日行われる水かけ祭り（「天天澆水節」という）。タイ族の水かけ祭りを体験し、タイ族の娘と観光客が水をかけあい、祝福する内容である。また、2003年3月の調査では以下の内容が掲示されていた。1) 民族歌舞の表演（Dai Song and Dance of Performance）、2) 王の結婚式（The Dai King takes in a son-in-law）、3) 仏教儀礼の上演（Display of Buddhist Ceremony）、4) 宮廷舞（Palace Dancing）、5) 竹笛の演奏（Dai Bamboo Flute）、6) 象脚鼓舞（Elephant Drum Dancing）。これらは西双版纳民族風情園、曼听公園、西双版纳原始森林公園等で上演されている歌舞ショーとは違った内容になっているが、芸術的には洗練された内容になっている。

## 文 献

### 艾温扁

- 1999 「提高西双版纳旅游景区的文化含量」『思想戦線』25(5)：39-42。

### 足立照也

- 2000 「エスニック・ツーリズムの可能性」石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子編『新しい観光と地域社会』東京：古今書院，49-62。

### 陳棟生・魏後凱等

- 1996 『西部經濟崛起之路』上海：上海遠東出版社。

### 刀愛民

- 1993 「展望未来 負重致遠」張亮・蘇友發編『西双版纳四十年 1953.1.23-1993.1.23』景洪：西双版纳報社印刷場，1-16。
- 1994 「“熱帶雨林”州的改革開放」閔道多吉編『民族地区改革開放』北京：民族出版社，150-154。
- 1995 「投資者施展宏圖的地方」平措汪傑編『中国民族自治指南』北京：中国藏学出版社，189-211。

### 刀国華

- 1997 「西双版纳民族旅游業的發展」『版纳』1997-2：52-54。

### 鄧永進・薛群慧・趙伯榮

- 1997 『民俗風情旅游』昆明：雲南大学出版社。

### 罕華興

- 2000 「西双版纳旅游文化深層次開發趨議」黃洪慶編『西双版纳社会科学論文選』昆明：雲南民族出版社，269-274。

### 長谷川清

- 2001a 「観光開発と民族社会の変容」佐々木信彰編『現代中国の民族と経済』東京：世界思想社，107-131。

- 2001b Ethnic Tourism and Cultural Change in the Border Region of Yunnan Province: A Case Study on Xishuangbanna Dai Autonomous Prefecture, In Hayashi Yukio & Aroonrut Wichienkeo (eds.), *Inter-Ethnic Relations in the Making of Mainland Southeast Asia and Southwestern China*, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, pp.291-310.
- 2003 「フロンティアにおける人口流動と民族間関係—雲南省、西双版纳タイ族自治州の事例」塚田誠之編『民族の移動と文化の動態—中国周縁地域の歴史と現在』東京：風響社，239-290。
- 黄洪慶  
1993 「曼景蘭村傣味食品街—農民致富的啓示」『民族工作』1993-4：28-29。
- 黄金有  
1999 「西双版纳旅游業的可持續發展」『版纳』1999-1：58-64。
- 李瑾・石莉・曾珩編  
1996 『雲南旅游總覽』昆明：雲南人民出版社。
- 李鉄柱  
1994 「我国興建民族文化村的幾個問題」民族文化宮展覽館（編）1994『民族学博物館学散論』北京：中央民族大学出版社，47-55。
- 李長風  
2005 『雪泥鴻爪—歷史，民族，文化漫記』昆明：雲南民族出版社。
- 劉隆・胡桐元等編  
1990 『西双版纳国土經濟考察報告』昆明：雲南人民出版社。
- 羅紅英  
1999 「西双版纳旅游業的定位及走向」『思想戰線』25(4)：96-98。
- 羅明義編  
2001 『21世紀雲南旅游業發展研究』昆明：雲南大学出版社。
- 松村嘉久  
2001 「中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略」『東アジア研究』第32号：25-46。
- 聶乾先  
2003 『雲南民族舞蹈文集』北京：中国文聯出版社。
- Oakes, Timothy S.  
1997 “Ethnic Tourism in Rural Guizhou: Sense of Place and the Commerce of Authenticity. In *Tourism, Ethnicity, and the State in Asian and Pacific Societies*, ed. by Michel Picard & Robert E. Wood. University of Hawaii Press, Honolulu, pp.35-70.
- 1998 *Tourism and Modernity in China*. London: Rutledge.
- 彭英明  
1995 『新編民族理論与民族問題教程』北京：中央民族出版社。
- 彭文斌  
1998 「中国民俗旅游的発展及中国学術界の参与趨勢」王筑生編『人類学与西南民族』昆明：雲南大学出版社，267-294。
- 秦家華・岩温扁  
2000 「傣族貝葉文化与西双版纳旅游業」『思想戰線』2000-6：76-77。

瀬川昌久

- 1999 「中国南部におけるエスニック観光と『伝統文化』の再定義」『東北アジア研究』第3号：85-111。

史軍超

- 2003 「橄榄坝傣族鄉村文化開發」張徳文・納麒編『雲南文化發展藍皮書 2002～2003』昆明：雲南大学出版社，421-429。

石茂明

- 1995a 「注目今年流行什么？—95民族文化開發熱点談」『民族團結』1995-1：7-9。  
1995b 「民族文化的市場開發与民族文化旅遊」『民族文化』1995-4：47-48。

Tan Chen-Beng, Sidney C. Cheng and Yang Hui (eds.)

- 2001 Tourism, Anthropology and China, Bangkok: White Lotus.

呉必虎・余青

- 2000 「中国民族文化旅遊開發研究綜述」『民族研究』2000-4期。

王嵐

- 2003 「雲南民俗旅遊資源開發中的幾個問題」『雲南民族大學學報』2003-3：50-53。

王軍健

- 1999 「西双版纳旅遊資源開發的幾点思考」『思想戰線』25(4)：99-102。

汪涛

- 1993 「跨世紀的腳步—西双版纳旅遊業掃描」『版纳』1993-1・2：4-13。  
2000 「美麗的西双版纳」『版纳』2000・A：6-15。

西双版纳風景名勝区規劃建設委員會編

- 1989 『西双版纳覽勝』成都：四川辭書出版社。

西双版纳州旅遊局編

- 1999 『西双版纳旅遊指南』景洪：西双版纳州旅遊局。

楊美清・征鵬

- 1986 『西双版纳風物志』昆明：雲南教育出版社。

楊勝能

- 1998 『西双版纳旅遊集萃』昆明：雲南民族出版社。

尹澤生・趙洪中

- 1998 『景洪市旅遊資源』成都：四川教育出版社。

横山廣子

- 2004 「観光を中心とする經濟發展と文化—雲南省大理盆地の場合」横山廣子編『少数民族の文化と社会の動態—東アジアからの視点—』国立民族学博物館調査報告 50, 181-203。

袁国光

- 1997 「民族旅遊村風情画」『版纳』1997-2：35-36。

張艾

- 1997 「雲南民舞資源開發引出的思考」劉金吾編『滇舞論壇—雲南省首届少数民族舞蹈理論研討會論文集』昆明：雲南人民出版社，63-78。

張曉萍

- 2002 「文化旅遊資源開發的人類学的透視」2002-1：31-34。

張曉萍・揚慧・趙紅梅編

- 2005 『民族旅遊的人類学的透視』昆明：雲南大学出版社。

鄭海

- 2003 「雲南民族地区旅游業發展報告」郭家驥編『雲南民族地区發展報告 2002～2003』, 昆明: 雲南大學出版社, 83-102。

征鵬

- 1981 『西双版纳風情』昆明: 雲南民族出版社。

征鵬・楊勝能

- 1993 『西双版纳風情奇趣錄』昆明: 雲南民族出版社。

中国西南民族研究学会編

- 2001 『走進西部—西部大開發与西南民族研究』貴陽: 貴州民族出版社。

中共雲南省委党史研究室編

- 1998 『雲南改革開放二十年』昆明: 雲南民族出版社。

中共雲南省委政策研究室編

- 1986 『雲南省情』昆明: 雲南人民出版社。

- 1993 『一九九二年的雲南』昆明。

中共雲南省委弁公廳・雲南省政府研究室編

- 1997 『雲南支柱產業論』昆明: 雲南人民出版社。

周怡文・祁慶富

- 1994 「民族文化村理論及其在中国的實踐」『民族学与現代化』北京: 中央民族大學出版社, 77-92。

周星

- 2001 「旅游產業与少数民族的文化展示」横山廣子編『中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』国立民族学博物館調査報告 20, 185-231。